

巻頭言 八重山のポピュラーソング

昨年の暮れ、実家に帰ってNHKの紅白歌合戦を見ていたら、沖縄のシンガーないし沖縄的な歌を歌うグループがいくつかあって目を引いた。中でも‘Begin’と‘夏川りみ’は八重山出身ということで、私が当地に滞在した1980年代末ごろのことを思い出した。

Beginは、ちょうどその、私が石垣島にいたころに売れ出したグループである。直接見たことはないが、彼らが島に帰省すると地元の新聞が早速取り上げ、高校生などにも人気があった。地元出身、全国版で成功したということが、島の若者たちにあこがれを抱かせている様子が伺われた。一方、夏川りみという歌手には、会ったことがある。ローティーンでデビューした子で、当時は‘星美里’という芸名だった。私がやっかいになっていた塾にこの子の妹が来ていて、塾長が「一度お姉さん連れて遊びに来なさい」と声をかけた。私ほか塾の講師たち、話を聞いてやってきた塾生OBの男の子などと一緒に会ったが、中3くらいでおとなしく、あまりしゃべらない子であった。若い塾長はじめ、男達は舞い上がってちやほやしていたが、30過ぎたおっさんが同じようにはしゃぐわけにも行くまいと、私が静かにしていたところ、OBの男の子から、「すました顔して、かっこつけないほうがいいよ」とたしなめられてしまった（この子はあとで、塾長からたっぷり油を絞られたようである）。

それはともかく、私が気になったのは、当時この少女歌手に対しては、Beginのように、島を挙げて応援しているという雰囲気になかったことである。特に、私が教えていた女子高生たちなどは、ほとんど嫌悪に近い感情を示すので驚いた。「だって、最初の芸名、‘南国星子’っていうんだよ」と、憤懣やる方ない様子である。この芸名といい、また当時の星美里にしても、確かにセンスが悪い。このような無神経な命名によって、地元の全面的な支持が得られなかったことが、この歌手がデビュー後長く芽の出なかった理由の一つかもしれない。しかし芸名の件は若いこの子の責任ではなく、特に女の子たちには、同世代の‘有名人’に対する嫉妬の感情もあるのだろう、と私は想像していた。

しかし今回紅白を見ていて、当時の島の子達の両者への反応が、なんとなくわかった気がした。Beginが歌った「島人ぬ宝」は、石垣の小学生たちの作文を取り入れて作ったということで、詞も今の島の若者たちの、ほとんど標準語化された言葉である。ただ語り口や歌い方のイントネーションに、八重山らしい、南島らしい響きが感じられるにすぎない。衣装も普通の島の兄ちゃんの、つまり日本のどこでも若者が着ているような服であった。歌の内容も、自分たちは星の名前もサンゴの名前も（‘科学的’な正式名称は？）知らないけれど、それが大切なものであることは知っている。汚れていく海は悲しいが、それをどうしたらよいかわからない、と、島人としての誇りと、外の世界へのコンプレックスがないまぜになった、率直な感情を表現している。たし

かにこのあたりが、今の島の若者の感覚だろうと思わせるものがあるし、それをストレートに表現したところに、彼らの共感を得る素地があったのだろう。一方、夏川りみの「涙そうそう」は淡い恋愛歌だが、歌手はその二番を、全くの「島言葉」で歌った。もちろん 'ヤマトンチュ' には理解不能だから、字幕付きである。しかし意味不明なのは、ヤマトンチュだけではあるまい。こうした言葉を使いこなせる人は、島でもかなりの高齢層に属するのであり、その人たちも、ふだんは‘標準語’で若者たちと接している。つまり、すでに死んだ言葉である。衣装は青のミンサーであった。私は石垣島で、ミンサーの服を着ている人を見たことがない。ふだん着ない服を着、使わない言葉を使い、しかもそれが「沖縄」であり「八重山」であるという。ここには‘南国星子’に符合する何ものかがある。かつての島の若者たちは、はっきりと論理化した形では言わなかったが、わかりやすく代弁すると、こういうことになるのではないか — 「石垣島を、安っぽい形で売り物にしている」。

日本人一般ということに広げれば、たとえば海外で「ハラキリ」などの芸をしたり、ことさらに羽織袴をつけて「日本」をアピールする日本人を見て感ずる違和感と、同質のものがありそうだ。そのような売り込み方は真の相互理解につながらず、日本人に対する誤解や侮りすら生みかねない。だから今ある姿をありのままに示すしかないのだというこの立場は、多くの共感を得るだろう。しかし一方で、こうした方向性は、より大きなものに飲み込まれて今わずかに残る独自性すら放棄して行く危うさをもはらむ。島の若者たちは星やサンゴの「科学的正式名称」を知らないばかりでなく、それらに対する八重山の伝統的な呼び名も知らないであろう。彼らは何者なのか。そして、どこに行こうとしているのか。

〇〇的、〇〇独自、という考え方は、われわれが事とする科学研究においても他人事ではない。科学はもともと西欧で発達してきた。日本人がその中に踏み込んだとき、全く西欧的自然観に同化しようとするのも一つの方向だが、それに飽き足らず、あえて日本的、日本独自という視点を持つとどうなるか。後者の方向性によって比較的成功したと言われるものに、いわゆる「京都のサル学」がある。黎明期、日本サル学の息吹を伝える伊谷純一郎著「高崎山のサル」は、擬人的表現と、対象に対する著者の思い入れに満ちている。それが欧米研究者を驚かせ、「これは科学研究ではなく、動物文学」という批判をすら生んだ。しかしこのグループが採用した個体識別の手法は霊長類学に転機をもたらし、社会構造の研究は飛躍的に進展した。日本人にとってサルは「おさるさん」であり、欧米人よりはずっと人間に近いと感じている。だから一頭一頭、顔で見分けられるくらいあたりまえだ、と彼らはそういう意識だっただろう。あるがままの‘日本’を自然に打ち出して開いた新天地。そのようにも見えるが、しかし一方、伊谷の講義を受けた世代の私は、当時のこの大学の動物学系の中に、意識的な‘日本’への志向性があったという印象をも持っている。

画一化された価値観ではなく、それぞれが独自の方向性を持ち、成果を挙げつつ刺激しあう。それを理想とするコンセンサスが仮に得られたとしても、実現する方法は一樣ではない。意識することがよいのか、しないことがよいのか。紅白の舞台に立った八重山のシンガーたちを見ながら、しばし思いを馳せた。 < S >